
土地分類基本調査

七 戸

5万分の1

国 土 調 査

青 森 県

1990

序 文

都道府県土地分類基本調査は、限りある国土の適正な利用、解説および保全に資することを目的として国土調査法に基づき実施しているものです。

その内容は、国土地理院発行の5万分の1の地形図をベースに、地形、表層地質、土壌、土地利用現況等の土地の属性を統一的に整理した資料に基づき調査を行い、土地を客観的かつ総合的に把握するものです。

本県では、昭和40年3月に経済企画庁「八戸」図幅が発行されて以来、県内43図幅のうち本冊子で19図幅を完成させることができました。

これらの成果が、今後の有効適切な土地利用のために、広く各界各層において利用されることを望みます。

この調査の実施に際し、御指導と御協力をいただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

平成3年3月

青森県農林部長

本 儀 隆

調査担当者一覧表

総合・企画指導	国土庁土地局国土調査課				
総括	青森県農林部土地改良第一課				
地形分類調査	弘前大学教育学部	教	授	水野裕	
	八戸工業高等専門学校	教	授	堀田報誠	
表層地質調査	弘前大学教育学部	教	授	岩井武彦	
土 壌 調 査					
山地丘陵地の土壌（林地）					
	青森営林局盛岡営林署	連絡室次長		松尾弘	
	青森県林業試験場	研究管理員		岩村良男	
台地及び低地の土壌（農用地）					
	青森県農業試験場	次長		相馬駿春	
	〃	化学部長		鎌田健造	
土地利用現況調査	青森県農林部土地改良第一課	主	幹	佐藤春夫	

目 次

序 文

総 論

I 位置及び行政区画	1
II 地域の特性	4
1. 地勢・気候	4
2. 人口と世帯数	7
3. 交 通	8
4. 産 業	9

各 論

I 地形分類図	13
1. 地形概説	13
2. 地形細説	13
II 表層地質図	19
1. 地質概説	19
2. 表層地質細説	19
III 土壌図	30
1. 土壌分類の細説	30
(1) 山地及び丘陵地の林地土壌	30
(2) 台地及び低地の農用地土壌	31
IV 土地利用現況図	40

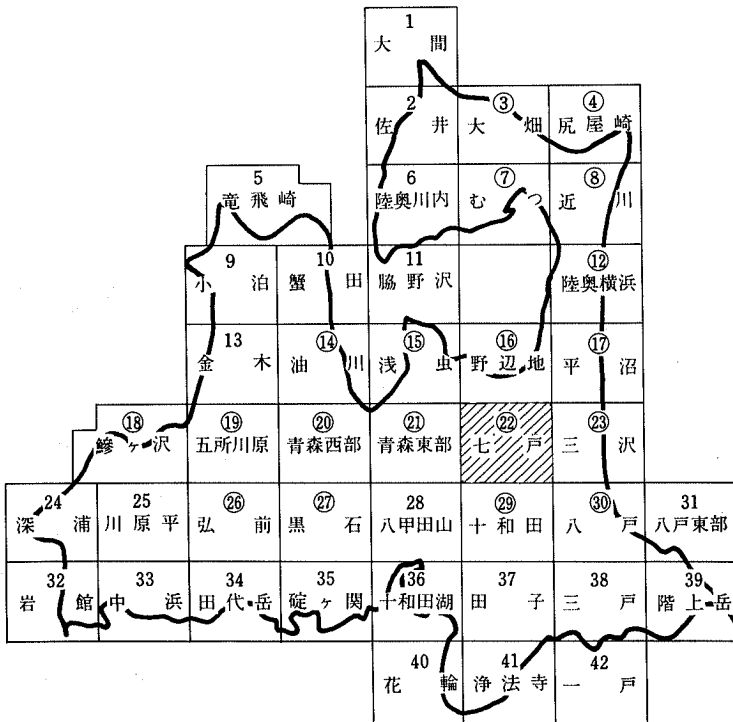
總論

I 位置及び行政区画

1. 位置

「七戸」図幅は青森県の東部に位置し、東経 141° 00′ ~141° 15′，北緯40° 40′ ~ 40° 50′ の範囲内にあり、図幅内調査面積は390.40㎏である。

第1図 位置図



注) ○印は印刷発行済図幅である。

2. 行政区画

本図幅内の行政区画は十和田市、野辺地町、七戸町、上北町、東北町、平内町及び天間林村の1市5町1村からなっており、その展開は第2図のとおりである。

この図幅に占める7市町村面積の割合は、第1表に示すように当該村全体面積の30.4%である。

第2図 行政区域図



第1表 市町村別面積

(単位：km²：%)

市町村	全体面積		図幅内面積		占有率 B A
	面積(A)	比率	面積(B)	比率	
十和田市	318.39	24.8	15.42	3.9	4.8
野辺地町	82.66	6.4	1.53	0.4	1.9
七戸町	136.08	10.6	104.78	26.9	77.0
上北町	119.25	9.3	20.91	5.3	17.5
東北町	209.72	16.4	97.76	25.1	46.6
平内町	215.98	16.9	3.83	1.0	1.8
天間林村	199.92	15.6	145.77	37.4	72.9
計	1,282.00	100.0	390.00	100.0	30.4

- 建設省国土地理院「昭和63年全国都道府県市町村別面積調」（昭和63年10月1日現在）
- 図幅内面積，5万分の1地形図をプランメーターにより計測したものである。

II 地域の特徴

1. 地勢・気候

(1) 地 勢

この地域は青森県の東部に位置し、西側一帯は広大な国有林野で八甲田山系が広がり、中央部から東部に延びる丘陵は緩やかに傾斜しながら台地を形成している。

主要河川のすべては西側の八甲田山系に源を發し東流する坪川が七戸川と合流し高瀬川より本図幅中央部より隣接する「三沢」図幅内にある、小川原湖に注いでいる。

本図幅内で一番広い面積を占める台地は、火山灰土壌が多く、耕地のほとんどは植壤土で酸性度の強い土壌であるが、これらの河川流域に水田、丘陵地帯に畑、草地在らひらけている地域となっている。

(2) 気 候

本図幅内に観測所がないことから、北側の野辺地区図幅内に位置する野辺地観測所と、南側の十和田図幅内に位置する十和田観測所の2ヶ所の記録による。

特筆すべきことは、古来より夏期に、冷涼な偏東風（通称、ヤマセ）が5月から7月にかけて吹き、農作物に甚大な被害を与えるなどしばしば冷害による不作を招いている。

積雪は、本図幅内西側の山地部に近接するほど多く、南側に寄るほど少ない傾向にある。

月別気象表

野辺地域気象観測所

第2表(1)

区分	月別												備考
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
日最高気温高い(°C)	11.0 (54)	13.8 (54)	15.1 (57)	25.8 (62)	28.9 (55)	33.3 (62)	31.5 (60)	34.2 (60)	32.0 (60)	25.0 (60)	19.6 (55)	14.1 (57)	昭和54年 ~昭和62年
日最高気温低い(°C)	-7.7 (61)	-6.4 (59)	-3.2 (55)	0.7 (55)	5.4 (54)	10.9 (57)	12.4 (61)	15.7 (55)	14.6 (62)	5.2 (59)	-1.7 (56)	-7.1 (59)	"
日最低気温高い(°C)	4.3 (58)	1.5 (62)	3.5 (57)	12.6 (58)	13.6 (57)	18.7 (54)	22.6 (62)	22.8 (58)	22.5 (60)	15.6 (60)	12.6 (60)	5.9 (55)	"
日最低気温低い(°C)	-12.4 (55)	-12.6 (55)	-12.1 (61)	-7.6 (59)	-2.4 (62)	1.7 (60)	9.2 (54)	10.9 (54)	5.5 (58)	0.1 (61)	-6.1 (57)	-10.6 (59)	"
月平均気温高い(°C)	-0.7 (58)	-0.6 (54)	1.7 (57)	9.8 (58)	13.0 (58)	17.7 (55)	20.9 (59)	24.0 (60)	18.3 (61)	13.6 (54)	7.1 (55)	2.8 (54)	"
月平均気温低い(°C)	-4.5 (60)	-3.4 (61)	-0.8 (59)	3.5 (59)	9.6 (59)	13.0 (58)	16.7 (61)	17.6 (55)	16.1 (56)	10.2 (58)	3.2 (56)	-0.8 (60)	"
月平均気温(°C)	-2.4	-2.2	-0.8	6.6	11.7	15.5	19.2	21.4	17.4	11.7	5.5	0.9	"
1時間降水量(mm)	8 (56)	5 (61)	7 (54)	15 (56)	10 (59)	11 (55)	24 (59)	24 (59)	20 (54)	39 (54)	8 (61)	8 (62)	"
日降水量(mm)	49 (55)	35 (60)	35 (57)	66 (56)	99 (57)	57 (58)	61 (61)	134 (56)	70 (56)	74 (55)	43 (54)	34 (62)	"
月降水量多い(mm)	169 (54)	158 (58)	113 (59)	165 (57)	235 (57)	163 (58)	234 (59)	380 (56)	207 (54)	220 (54)	184 (60)	148 (59)	"
月降水量少ない(mm)	68 (59)	62 (55)	37 (55)	30 (62)	51 (55)	40 (60)	44 (57)	70 (59)	90 (62)	58 (62)	52 (59)	73 (61)	"
日最大風速風向(m/s)	9W (58)	10W (54)	15X (54)	12W (62)	12W (58)	6WSW (57)	6W (60)	8X (56)	9W (57)	9W (57)	10W (62)	11W (61)	"
月最深積雪(cm)	125 (42)	150 (39)	138 (56)	73 (40)							58 (50)	77 (57)	昭和39年 ~昭和57年

()は発生年次

月別気象表

十和田地域気象観測所

第2表(2)

区分	月別												備考
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
日最高気温高い(°C)	10.9 (54)	13.2 (54)	16.2 (55)	25.6 (62)	30.1 (55)	33.8 (62)	34.5 (61)	34.2 (60)	30.9 (60)	25.7 (62)	20.1 (54)	15.6 (57)	昭和54年 ~昭和62年
日最高気温低い(°C)	-8.0 (60)	-6.7 (59)	-3.6 (55)	1.0 (55)	5.3 (54)	10.4 (56)	12.6 (58)	15.6 (62)	14.3 (62)	5.4 (59)	-1.2 (62)	-5.8 (59)	"
日最低気温高い(°C)	4.0 (58)	0.9 (62)	3.9 (57)	12.6 (58)	16.1 (60)	21.2 (54)	24.3 (54)	24.7 (60)	22.3 (60)	16.4 (60)	12.1 (54)	8.7 (62)	"
日最低気温低い(°C)	-16.0 (59)	-17.8 (55)	-16.7 (61)	-9.8 (59)	-0.4 (62)	1.2 (60)	6.9 (54)	9.6 (55)	4.7 (59)	-1.5 (61)	-8.7 (56)	-14.4 (58)	"
月平均気温高い(°C)	-1.0 (58)	-0.6 (54)	2.3 (57)	10.3 (58)	13.7 (58)	18.7 (55)	21.7 (56)	24.5 (60)	18.2 (61)	13.5 (54)	6.5 (55)	2.2 (54)	"
月平均気温低い(°C)	-5.6 (60)	-4.7 (59)	-1.9 (59)	3.3 (59)	10.0 (59)	13.4 (58)	17.3 (58)	17.4 (55)	16.0 (56)	9.9 (58)	3.0 (56)	-1.2 (60)	"
月平均気温(°C)	-2.8	-2.7	0.7	7.0	12.5	16.1	19.4	21.6	17.2	11.4	5.2	0.5	"
1時間降水量(mm)	5 (56)	5 (56)	8 (54)	6 (57)	16 (57)	14 (57)	32 (56)	22 (56)	25 (54)	24 (54)	12 (54)	6 (58)	"
日降水量(mm)	34 (55)	26 (58)	26 (54)	64 (59)	146 (57)	70 (55)	65 (55)	126 (61)	72 (54)	61 (55)	48 (54)	26 (55)	"
月降水量多い(mm)	63 (54)	66 (58)	60 (58)	114 (59)	264 (57)	135 (56)	238 (58)	365 (55)	206 (54)	170 (54)	130 (54)	46 (58)	"
月降水量少ない(mm)	6 (61)	6 (57)	28 (61)	16 (62)	45 (55)	32 (59)	20 (57)	31 (60)	91 (61)	22 (62)	17 (59)	20 (60)	"
日最大風速風向(m/s)	11WNW (62)	12W (54)	13X (54)	11WNW (61)	12N (57)	9NNE (58)	9WNW (54)	9NSW (56)	10NW (58)	15NNW (54)	11W (54)	12NW (56)	"
月最深積雪(cm)	65 (53)	117 (39)	88 (58)	55 (59)							20 (57)	48 (57)	昭和39年 ~昭和60年

() は発生年次

2. 人口・世帯数

図幅内7市町村，昭和55年から平成2年までの国勢調査による人口動態は，この10年間で3,527人，およそ2.5%の減となっている。

しかし世帯数では，逆に2,648世帯，6.9%が増加しており，1世帯当たり3.33人は県内平均の3.26人に比べ0.07人多い。人口を地域別にみると，十和田市だけが3.4%の微増となっているが，この5年間の動向をみると全地域が減少になっている。

第3表 市町村別人口と世帯数

(単位：人，世帯)

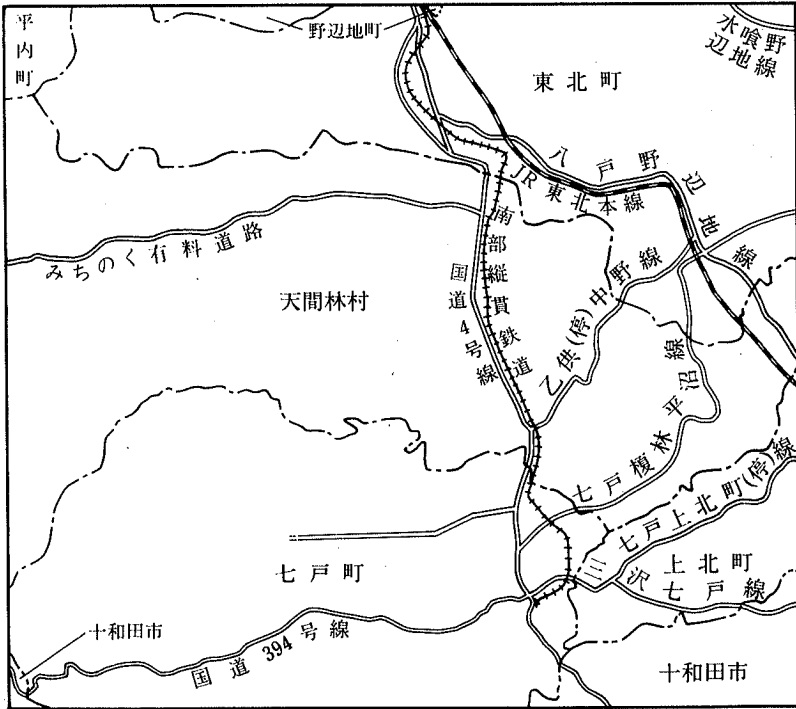
市町村	年別 区分	昭和55年 国勢調査	昭和60年 国勢調査	平成2年 国勢調査	$\frac{C}{A} \times 100$ %	1世帯当り の平均人員		平成2年 1km ² 当り 人口密度
		(A)	(B)	(C)		55年	2年	
十和田市	人口	58,886	61,295	60,916	103.4			
	世帯数	17,493	19,016	19,753	112.9	3.37	3.08	191.3
野辺地町	人口	18,419	18,351	16,752	90.9			
	世帯数	5,494	5,722	5,556	101.1	3.35	3.02	202.66
七戸町	人口	12,679	12,317	11,545	91.1			
	世帯数	3,508	3,525	3,422	97.5	3.61	3.37	84.84
上北町	人口	10,473	10,536	10,307	98.4			
	世帯数	2,466	2,577	2,625	106.4	4.25	3.93	86.43
東北町	人口	12,114	11,797	11,258	92.9			
	世帯数	2,883	2,969	2,957	102.6	4.20	3.81	53.68
平内町	人口	17,501	17,246	16,103	92.0			
	世帯数	4,255	4,345	4,350	102.2	4.11	3.70	74.56
天間林村	人口	10,028	10,025	9,692	96.6			
	世帯数	2,229	2,325	2,313	103.8	4.50	4.19	48.48
計	人口	140,100	141,567	136,573	97.5			
	世帯数	38,328	40,479	40,976	106.9	3.66	3.33	106.53

3. 交通

この地域における交通体系は、第3図に示すとおりであるが、鉄道については、図幅内北東部を斜走するJR東北本線と七戸町、野辺地町を結ぶ私鉄、南部縦貫鉄道が北上している。又、天間林村天間館と青森市滝沢を結ぶみちのく有料道路は、昭和55年から開通し、県南地域と県都青森市を短時間で結ぶ重要な交通ルートとなっている。

一方、国道については、国道4号線のほか、七戸町と黒石市を結ぶ国道394号線が基幹的役割を担っており、地方道では野辺地町と三沢市を結ぶ八戸野辺地線及び七戸榎林平沼線、三沢七戸線などがみられる。

第3図 主要交通図



4. 産 業

7市町村の産業別就業人口の増減傾向は昭和55年の国勢調査時点に較べ和60年では、1,017人、と約1.5%の増となっている。

これを産業別にみると第1次産業で825人(3.8%)減少しているものの第2次産業では279人(1.9%)の増加がみられ、また第3次産業では1,501人(4.9%)の増となっている。

この地域の経済は、農林水産業が殆どであり、商業は個人経営の商店が多いほか、工業は水産加工、食料品製造、木材業などの軽工業が中心となっている。

農林業については、水稻を中心に長芋、大根、ニンジン、ニンニクなどの野菜との複合経営が定着しており、酪農は、東北町で県を代表する酪農地帯を形成し、乳用牛、肉用牛の飼養の増大傾向がみられる。

漁業については、本図幅東側に隣接する三沢図幅内にある、小川原湖の内水面漁業がみられ、シラウオ、ワカサギ、シジミ貝を中心に漁獲が図られている。又、これらの加工品として、佃煮が特産物として広く知られている。

第4表 産業別就業人口

(単位:人)

区分	総数	第1次産業				第2次産業				第3次産業
		農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	計	
市町村	(29,013)	(7,083)	(151)	(18)	(7,252)	(53)	(3,596)	(3,026)	(6,675)	(15,074)
十和田市	29,992	6,825	119	17	6,961	39	3,293	3,576	6,908	16,060
野辺地町	(7,753)	(494)	(156)	(701)	(1,351)	(2)	(1,316)	(624)	(1,942)	(4,460)
	7,849	500	112	615	1,227	2	1,366	671	2,039	4,583
七戸町	(6,030)	(1,605)	(88)	(12)	(1,705)	(0)	(728)	(566)	(1,294)	(3,030)
	5,898	1,554	27	11	1,592	—	603	632	1,235	3,060
上北町	(5,161)	(2,180)	(17)	(54)	(2,251)	(0)	(668)	(421)	(1,089)	(1,820)
	5,145	1,996	18	64	2,078	—	629	496	1,125	1,939
東北町	(6,123)	(3,302)	(98)	(70)	(3,470)	(0)	(682)	(211)	(893)	(1,760)
	5,930	3,037	72	37	3,146	—	631	333	964	1,819
平内町	(8,312)	(1,026)	(123)	(1,848)	(2,997)	(4)	(1,471)	(722)	(2,197)	(3,116)
	8,297	981	104	1,916	3,001	8	1,166	945	2,119	3,117
天間林村	(4,926)	(2,612)	(76)	(36)	(2,724)	(14)	(643)	(280)	(937)	(1,262)
	5,224	2,834	55	31	2,920	1	549	366	916	1,385
計	(87,318)	(18,302)	(709)	(2,739)	(21,750)	(73)	(9,104)	(5,850)	(15,027)	(30,522)
	(100)	(20.9)	(0.8)	(3.1)	(24.8)	(0.08)	(10.4)	(6.7)	(17.2)	(34.8)
	68,335	17,727	507	2,691	20,925	50	8,237	7,019	15,306	32,023
	(100)	(25.6)	(0.7)	(3.9)	(30.6)	(0.07)	(12.0)	(10.2)	(22.4)	(46.9)

昭和60年「国勢調査」による。()内数字は昭和55年国勢調査
 総数には「分数不能」の産業を含む。()内数字は構成比%

第5表 市町村別産業別純生産

(単位：百万円、%)

区分 市町村	生産所得	第1次産業				第2次産業				第3次産業
		農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	計	
十和田市	(100) 113,079	8,881	370	43	(8.2) 9,294	255	9,093	11,247	(18.2) 20,594	(73.6) 83,190
野辺地町	(100) 26,275	608	187	565	(5.2) 1,361	53	2,403	1,800	(16.2) 4,257	(78.6) 20,657
七戸町	(100) 17,717	1,644	130	0	(10.0) 1,774	168	1,714	1,591	(19.6) 3,473	(70.4) 12,470
上北町	(100) 12,059	2,369	18	827	(26.7) 3,215	0	1,898	622	(20.9) 2,520	(52.4) 6,324
東北町	(100) 16,350	3,883	445	1,490	(35.6) 5,819	21	1,967	809	(17.1) 2,797	(47.3) 7,733
平内町	(100) 22,025	1,176	240	3,508	(22.4) 4,924	255	2,563	1,657	(20.3) 4,475	(57.3) 12,626
天間林村	(100) 10,514	3,182	313	0	(33.2) 3,496	153	1,371	418	(18.5) 1,942	(48.3) 5,077
計	(100) 218,019	21,743	1,703	6,433	(13.7) 29,883	905	21,009	18,144	(18.4) 40,058	(67.9) 148,077

青森県企画部統計課「平成2年3月市町村民所得統計」()内数字は構成比
注：区分の計は、四捨五入の関係で合致していないものもある。

第6表 製造業と商業

区分 市町村	製造業 (元・12)			商業 (63・6)		
	事業所数	従業者数 人	出荷額 万円	商店数	従業員数 人	年間販売額 万円
十和田市	127	4,509	4,272,225	1,114	5,367	18,588,874
野辺地町	39	665	725,715	356	1,553	2,155,648
七戸町	27	774	521,075	249	926	1,431,983
上北町	18	536	195,856	174	512	670,584
東北町	11	321	248,260	182	576	903,415
平内町	33	662	705,270	239	662	709,119
天間林村	9	204	118,684	112	427	444,723
計	264	7,671	6,787,086	2,426	10,023	24,904,346

青森県企画部統計課「昭和63年青森県の工業」、「昭和63年青森県の商業」

第7表 農業粗生産額（昭和63年）

（単位：百万円，％）

区分 市町村	粗生産額	耕 種					畜 産				養 蚕	加 工 農産物
		米	麦雑類	野 菜	果 実	工芸農作 物及 その他	乳肉牛	豚	鶏	その他		
十和田市	16,267	4,670	269	3,131	110	391	2,262	4,596	757	73	8	—
野辺地町	997	172	63	215	0	81	267	161	37	—	1	—
七戸町	2,624	726	56	898	63	31	516	241	0	92	1	—
上北町	3,755	1,392	68	963	1	606	110	545	0	70	—	—
東北町	7,482	737	394	3,196	—	123	2,611	76	329	14	2	—
平内町	1,593	923	58	252	4	61	239	28	—	28	—	—
天間林村	4,107	1,617	159	1,360	7	169	560	191	—	44	—	—
計	(100) 36,825	(27.8) 10,237	(2.9) 1,067	(27.2) 10,015	(0.5) 185	(4.0) 1,462	(17.8) 6,565	(15.9) 5,838	(3.0) 1,123	(0.9) 321	(0) 12	

第36次青森県農林水産統計年報より 麦雑類には豆、いも類も含む。()内数値は構成比

各 論

I 地形分類図

1. 地形概説

「七戸」図幅地域は青森県東部に位置し、図幅の西部には山地がみられるほか、中央部から東部にかけて台地が広い面積を占めている。この図幅の北西部に位置する烏帽子岳山地は隣接の「野辺地」図幅や「青森東部」図幅からつづく新第三系からなる山地で、半兵衛高森（445m）弥瀬山（425m）などを中心とした小起伏の山地である。また、図幅南西部の八幡岳山地は隣接の「青森東部」図幅からつづく新第三系の流紋岩質凝灰岩からなる山地で、八幡岳（1,022m）・大作山（456m）・屋形森（454m）などを中心とした中起伏の山地である。

本図幅内で一番広い面積を占める台地は、いずれも厚い火山灰層に被覆されており、隣接の（野辺地）・「十和田」・「三沢」の各図幅につづいている。

低地は図幅東部を東流する中小河川が合流して形成された七戸川沿いにみられ、隣接の「三沢」図幅につづく三角州の一部が図幅東端にわずかにみられる。

2. 地形細説

(1) 地形区

本図幅内の地形は、標高、起伏量、地形面の性質、構成物、地域的なまとまりなどから、山地（I a - I b）、台地（III a - c）、低地（IV a）に大別される。地形区としては次のように区別した。

「山地」	I a	烏帽子岳山地
	I b	八幡岳山地
「台地」	III a	乙供台地
	III b	七戸台地
	III c	三本木台地
「低地」	IV a	七戸川低地

(2) 地形分類

烏帽子岳山地 (I a)

本図幅の北西部に位置する山地で、図幅内では半兵衛高森 (445m) や弥瀬山 (425m) がピークとなっているが、この山地は隣接する「野辺地」図幅の烏帽子岳 (720m) につづいている。構成岩石は主として新第三系の緑色凝灰岩類や安山岩類などで、一部には砂岩やシルト岩もみられ、全体として小起伏の山地となっている。

八幡岳山地 (I b)

本図幅の南西部に広い範囲を占めている山地で、図幅南西端に主峰の八幡岳 (1,022m) がみられる。構成岩石は先第三系の基盤岩のほか、新第三系中新統の流紋岩質凝灰岩・泥岩・砂質凝灰岩などからなり、この山地を刻んで小坪川・作田川・和田川の各河川が東流している。なお、この山地の東端には、断層を想定させる数列のリニアメントが認められ、これは北隣の「野辺地」図幅までつづいている。

乙供台地 (III a)

台地の地形区は本図幅の過半を占め、図幅の右半分以上、つまり東半分以上が台地が卓越する地形地域である。台地地域内では北西から南東に流下する七戸川の一大支川である坪川と、台地内ではほぼ南西から北東に流下する七戸川本流により三区区分した。すなわち坪川の低地から北方の台地を乙供台地 (III a)、坪川の低地と七戸川の低地との間の台地を七戸台地 (III b)、七戸川低地から南方の台地を三本木台地 (III c) とした。

なお、この図幅の呼称している各面は、「十和田」図幅の場合と同様に宮内 (1985) の七百面はG t II Aに、高館面はG t II Bに、七戸面はG t II Cに、三本木面はG t II Dにそれぞれ相当する。

乙供台地 (III a) は、この図幅の北に隣接する「野辺地」図幅内では野辺地東部台地、野辺地西部台地と呼称した台地の南への連続域である。したがって、野辺地東部・細部台地でかなり広く分布する高位面 (G t I) の連続域がそのままこの台地の北部中央に中心をなすようにならんとまって分布している。G t I の高度は約90～130mであり、かなり起伏があるものの、頂部はなだらかで定高性がある。粘土まじりの円礫を構成層とし、これを厚さ4m前後の火山灰が覆っている。

中位の最高位面であるG t II AはこのG t Iを取り巻くように分布している。高度は約70～90mで、他のII面に比べて起伏が大きく、この面の末端付近では上に凸のいわば猫の足のようにもりあがった半ドーム状の丘の地形を示している。凸部の中央付近では火山灰層が厚く、上北地域対比の基準となる火山灰層（マーカーテフラ）のすべてが見られる。これら火山層の下にはG t Iの砂礫層と同様な粘土混じりの風化のすすんだ円礫の砂礫層がある。

中位の第2面であるG t II Bは乙供の東方、図幅の東縁の中央から東北に分布している。この面の主体は東隣の「三沢」図幅や、東南の「八戸」図幅にある。面の高度は約20～60mで、七戸川の河口に近いほど低くなる。構成層は野辺地層（三沢層）とよばれる10数m+の海成の砂層が主体でこれを数mの暑さの火山灰層が覆う。一般に火山層の厚いところではやや起伏があるものの平坦である。

中位の第3面であるG t II Cはこの乙供台地には分布していない。ここではG t II CよりもG t II Dが坪川低地の北方に、この低地に沿うように分布する。台地と山地との境界付近、すなわち坪川の谷口でのG t II Dの高度は約80mであり、坪川の下流域のG t II Bとの境界付近の一本木、朝日では約40mになる。この面は扇状地のように傾斜し、凹凸のない面である。構成物質は浮石流堆積物だけしか観察されないところが多いが、図幅内の他の台地では浮石流堆積物の下位に厚さ10数m+の粗粒の扇状地礫層が観察される。なお、G t II Dの主部は七戸台地（III b）にある。

下位面、G t IIIは、台地の末端部分に付着するように分布しているが、その面積は極めて狭い。図幅東縁の二ツ森、榎木付近での高度は約10～15mで七戸川低地との比高は5m以下であるが、上流域では河岸段丘となり高度は上がる。なお、構成物質はG t II Dに近いところでは浮石流堆積物になることがあるが一般には砂礫である。

七戸台地（III b）

この台地では、高位置であるG t Iと中位の第1面、G t II Aは八幡岳山地（I b）に付着するように台地西縁にわずかに分布している。構成物質、地形形態等は乙供台地（III a）と同様であるが、高度がやや低く、特にG t II Aの末端高度は約10mほど下がり約60mである。

中位の第2面であるG t II Bも乙供台地（III a）のG t II Bと同様で、この台地域の

東部に分布している海成の段丘面である。高度はやや低下して約15～30mである。この台地でも中位の第3面であるG t II Cは分布していない。

中位の第4面であるG t II Dはこの台地の大部分を占める。台地の西部の各支川の谷口付近の高度は、台地の北部及び南部では約70～80mであるが、中央部の鶴児平では約120mと高くなる。東部の末端高度は約30～40mであり、東に緩く傾きその平均傾斜は鶴児平では14/1,000程度で、七戸川の支川によって刻みこまれているところを除けば起伏が小さく全く平坦である。構成物質は、乙供台地(Ⅲ a)と同様に浮石流堆積物のみが観察されるところが多いが、台地北部の金沢付近や台地南部の和田川沿岸の露頭では約2～5mの浮石流堆積物の下位に数mから10数m+の扇状地砂礫層を観察することができる。

下位面であるG t IIIも、乙供台地(Ⅲ a)の場合と同様に台地の東部のG t II Bに付着して分布するほか、各河川沿いに河岸段丘として断片的に分布する。

三本木台地(Ⅲ c)

この台地は七戸川の南方、図幅の南東に分布する。この台地には高位面であるG t Iと中位の第4面であるG t II Dは分布していない。

中位の第1面であるG t II Aは図の南東端に僅かばかり分布しているが、この面の主体は何輪の「十和田」図幅や南東隣りの「八戸」図幅にあり、七百面とよばれている面である。

中位の第2面であるG t II Bはこの台地の東部を占める。面の高度は約20～50mである。構成物は台地のG t II Bと同様である。厚い海成の砂礫層である野辺地層(15m+)と、これに粘土質である沼崎泥層(3m+)が局部的に加わる。これがこの段丘の主構成層であるが、これらを厚さ数mの火山灰層が覆う。なお、この面の凹部や開析谷に沿うところでは浮石流堆積物が厚く埋め込んでいる地形がみられる。

中位の第3面であるG t II Cは乙供台地(Ⅲ a)や七戸台地(Ⅲ b)には分布せず、この台地にのみ分布する。この面の主体は南隣の「十和田」図幅にあり、その北の延長部分がこの面である。面の高度は約40～60mである。七戸台地(Ⅲ b)の鶴児平の面、G t II Bと同様に浮石流堆積物が主な構成層であるが、起伏は鶴児平に比較すると大きいところでは、扇状地砂礫層(3m+)上に浮石分が少ない火山灰層が堆積している露

頭も観察される。

下位面であるG t IIIは台地を刻む開析谷の谷底平野の縁辺に河岸段丘として断片的に分布していて、構成物がほとんど浮石流堆積物からなるものも見られる。

七戸川低地 (IV a)

本図幅内の低地は、図幅の南東に僅かに分布する砂土路川沿岸の低地を除けば、その他は七戸川の本支流沿岸にある低地である。

七戸川の主な支川には、北から赤川、坪川、中野川などがあるが、赤川の集水域はおもに台地であることから、乙供付近から下流の低地は全く低地であり、最下流の七戸川との合流地付近は三角州低地となっている。坪川、中野川、七戸川本川の低地は、これらの河川が台地と山地の境、つまり谷口から出て標高10数mまでは砂礫堆が見られるような急流河川沿いの扇状地性の低地である。高度10数mから下流では、曲流川跡が数多くみられる砂質、泥質の低地であり、本来、一般に曲流川跡の多い低地では自然堤防と後背湿地の双方が同一地に見られる低地となるのだが、自然堤防が未発達で相対的に後背湿地が広がっている。

参考文献

- 活断層研究会（1980）：日本の活断層 東大出版会
- 宮内崇裕（1985）：上北平野の段丘と第四紀地殻変動 地理学評論 58-8
- 宮内崇裕（1988）：東北日本北部における後期新世海成面の対比と編年 地理学評論 61-5
- 水野 裕・堀田報誠（1970）：1/20万地形分類図「青森県」 経済企画庁国土調査課
- 水野 裕・堀田報誠（1981）：1/5万「三沢」図幅 土地分類基本調査（地形分類） 青森県
- 水野 裕・堀田報誠（1983）：1/5万「青森東部」図幅 土地分類基本調査（地形分類） 青森県
- 水野 裕・堀田報誠（1988）：1/5万「十和田」図幅 土地分類基本調査（地形分類） 青森県
- 水野 裕・堀田報誠（1989）：1/5万「野辺地」図幅 土地分類基本調査（地形分類） 青森県
- 大池昭二（1972）：十和田火山東麓における完新世テフラの編年 第四紀研究 11
- 太田陽子ほか（1979）：青森県七戸町西方における段丘堆積物のC¹⁴年代と関連する問題 第四紀研究 18

II 表層地質図

1. 地質概説

本地域の西部は奥羽山脈の北端に近くであり、その山地と北入甲田火山の東翼をなす山地とによって構成され、東部は七戸扇状地および海岸段丘よりなる台地となっている。

山岳地には新第三系中新統の緑色凝灰岩・硬質頁岩（四ツ沢層）、安山岩質火山砕層岩・泥岩（和田川層）、シルト岩・砂岩互層（市ノ渡層）および砂岩（甲地層）が発達し、これらは流紋岩、石英安山岩、安山岩および玄武岩の熔岩や貫入岩を伴っている。

台地部の北部では第四系洪積統の砂・シルト（野辺地層）が厚く発達している。また、本図幅東端部には海岸段丘が形成されており、比較的厚いローム質火山によって広くおおわれている。本図幅の中央部は七戸川によって形成された七戸扇状地となっており、砂礫および軽石質砂礫などによって構成されされている。七戸川および砂土路川には比較的広い谷底平野が発達しており、土・砂によって構成されている。

地下資源としては現在稼働しているところはないが、過去には比較的大規模な鉱山活動が行われた。温泉もボーリングによって開発され、現在14本の温泉源泉が設けられている。地下水も全域に亘って比較的豊富で各町村の水道源として利用されている。その他、採石場および採土場は各地にみられる。

2. 表層地質細説

(1) 未固結堆積物

本図幅における未固結堆積物は沖積低地堆積物の粘土・砂・砂礫、河岸段丘・扇状地堆積物の砂・礫、六ヶ所層の粘土礫および野辺地層の砂・シルトなどである。

粘土・砂・礫 (cs)

本図幅中に発達する各河川の谷底平野に堆積しているもので、本図幅のほぼ中央部を西から東に流れる坪川と、その支流の赤川、中野川および七戸川では、上流部では主として砂礫よりなるが、下流部では砂および粘土が多くなる。また、これら河川の上流にあたる大坪川、小坪川、市ノ渡川、倉岡川、作田川および和田川などの谷底平野部は砂礫および礫が堆積している。北部の清水目川では、主として砂礫が、南部の砂土路川で

は泥質物が堆積している。

砂・礫 (g)

本図幅に発達する河川のうち、清水目川、坪川および作田川の中流部には河岸段丘が形成されている。段丘の幅は、いずれも狭く、その分布も小規模である。段丘堆積物は砂礫が主体をなし、その層厚は1～3mと薄いものである。

砂・礫 (sg₂)

本図幅のほぼ中央部一帯は、いわゆる七戸扇状地と呼称される台地が形成されている。この台地には小河原湖に注ぐ七戸川および砂土路川の本流や支流が数多く発達し、これらの河川によって広大な扇状地が形成されたものである。七戸扇状地の堆積物は、主として砂礫層からなるが、軽石流堆積物およびその2次の堆積物である軽石質砂礫層または砂礫質軽石層によって構成されている地域もある。本扇状地内で掘さくしたボーリングの資料によると、これらの砂礫層の暑さは30～50mにおよび(柱状図の5, 8, 9参照)、堆積物も地域によって、かなり異なっている。

また、本扇状地の末端はローム質火山灰におおわれる海岸段丘と接している。

砂・礫 (sg₁)

本図幅の南東部を流れる砂土路川の左岸には河岸段丘が形成されており、この段丘は安山岩、スコリヤおよび軽石粒を含む砂礫層によって構成されている。この砂礫層は南接する十和田市を中心に発達する三本木扇状地の堆積物と同種のものである。砂礫層は亜角～亜円礫で中礫も稀に混じるが、比較的淘汰の良好な細礫と粗粒砂とが混じたもので、層理の発達も良好で、しばしば偽層もみられる。層厚は2m～3mと比較的薄い。

粘土礫 (cg : 六ヶ所層)

本図幅の中央北部を流れる清水目川および赤川の左岸に発達する丘陵性の台地には、細～大円礫を多量に含む。いわゆる粘土礫が分布している。礫は安山岩が優勢であるが、硬質頁岩の～中円礫を含むのが特徴である。粘土は一部に灰～暗灰色を呈する部分もあるが、全体的に褐色～赤褐色である。

北部の野辺地川の左岸一帯に広く分布しており、岩井淳一(1951)によって六ヶ所層と命名されたものである。

なお、この粘土礫は坪川流域の向原子および黄金付近にも観察され、その分布は坪川以南にも及ぶものと思われる。

砂・シルト (Ns : 野辺地層)

本図幅の東部に発達する丘陵・台地は、いわゆるローム質火山灰および扇状地堆積物に薄くおおわれているが、その下部には、かなり厚い砂層が広く分布している。本砂層は第四系洪積統の野辺地層（三沢層）に属するもので、比較的締った黄褐色を呈する細粒砂が主体をなしている。野辺地層の砂層は北部の豊ヶ丘～枋、木一帯の丘陵、乙供付近に分布し、土取場が各所に散在しているため露出が良好である。全体的に層理が比較的明瞭で、斜交層理部、薄層理部及び塊状部とが互層状態を示す黄褐色の細粒砂層で、その暑さは30m以上である。一部に砂鉄層もみられ、また、シルト質の部分には良好な砂管が含まれている。

野辺地層のシルトは本図幅東端部丘陵・台地の河崖基底部に分布しており、東隣の沼崎を中心に発達していることから沼崎泥層と呼称されている。全体的に無層理塊状の青灰色シルトからなり、しばしばカキの密集帯を挟在している。貝化石は岩井他（1969年）によって62種が報告されているが、優勢種は *Arca boucard*, *Chlamys nipponesis*, *Ostrea. gigas*, *Raeta pulchella* 等である。また、上北町才市田（露頭番号25）のカキ密集部から *Elphidium cf. subarcticum*, *E. crispum*, *E. cf. jenseni*, *Rosalina bradyi*, *Uvigerinella glabra* 等10数種の底生有孔虫化石が採取できた。

(2) 団結堆積物

砂岩・シルト岩 (Ks : 甲地層)

本岩は新第三紀鮮新統の甲地層に属するもので、本図幅では清水目川下流部および東北部の赤川および岩渡沢付近にわずかに分布しているに過ぎない。本岩は主として固結～半固結の砂岩および無層理のシルト岩からなり、しばしば軽石質凝灰岩を挟在する。本岩の凝灰質細粒砂岩およびシルト岩には海綿の骨針が多量に含まれる特徴がある。清水目川流域の本岩は従来清水目層と呼ばれていたものである。なの、本図幅のほぼ中央部の底田付近には砂鉄鉱床が賦存しており、過去に採掘が行われた。この砂鉄鉱床を挟在している砂岩層は清水目層中の底田砂岩・礫岩部層として取り扱われているものであるが、現在地表に露出していないので地質図には塗色しなかった。

砂岩・シルト岩・凝灰岩 (lm : 市、渡層)

本岩は本図幅のほぼ中央部に南北の帯状をなして分布しており、主としてシルト岩と

砂岩との互層で構成されている。

シルト岩は灰白色～淡黄灰色を呈し、礫岩と砂岩層中に薄く挟在され、全般的に凝灰質である。一般に層理の発達は比較的良好であるが、一部にスランピング等の堆積構造がみられるほか、急傾斜・逆転構造が、しばしば観察される（作田川、上牧場付近など）。

砂岩は暗灰色～灰褐色を呈し、固結度は低い。礫岩をしばしば挟在し、この礫岩は主として安山岩の細～中円礫岩で基質は粗粒砂岩からなる。砂岩は比較的規模の大きい偽層を示すなど種々の堆積構造が発達する。

凝灰岩は灰色～黄白色～黄褐色を呈し、一般に塊状無層理～微層理を示し固結度は低い。本岩は白色の軽石岩片を主体とし、その充填物は石英や角閃石を含む凝灰質砂岩である。

砂質凝灰岩 (Ws : 和田川層)

本図幅の西端に近い大坪川、小坪川および作田川の上流部に分布する岩石で、安山岩質砕屑岩で、砂質凝灰岩と凝灰質砂岩とが互層をなしている。全体的に灰色～淡緑色～暗緑色等の雑色を呈し、細粒～中粒、塊状脆弱で層理は不明瞭である。また、安山岩質角礫岩層にも、しばしば薄い挟在している。安山岩質であることなどから和田川層の一構成岩と考えられている。

安山岩質火山砕屑岩 (Wa : 和田川層)

本岩は前記砂質凝灰岩と同じく、大坪川、小坪川の流域および作田川上流一帯に広く分布しているもので、安山岩の角礫～亜角礫を多量に含む火山礫凝灰岩、凝灰角礫岩および火山円礫岩などによって構成され、一部に砂質凝灰岩を挟在している。全体的に暗紫色～暗緑褐色を呈し、塊状無層理である。また、安山岩熔岩および貫入岩も所々に分布している。なお、天間ダム付近の本岩は火山円礫岩が主体となっている。

泥岩 (Wm : 和田川層)

本岩は天間ダム付近、小坪川上流および和田川上流などに分布している。本岩は黒灰色～灰褐色を呈し、一般にやや軟質で、層理がよく発達する場合と不明瞭な場合があり、一部では緑灰岩を挟在する。一部に安山岩の貫入がみられる。

緑色凝灰岩 (Yt : 四ツ沢層)

本岩は本図幅の西部山岳地のほぼ中央に南北の帯状をなして断続的に分布している。

清水目川上流の本岩は流紋岩および石英安山岩に取り囲まれるように分布し、脱色されて灰白の灰色を呈し、硫化鉄鉱の鉱染を受け一部は粘土化している。作田川上流でも流紋岩、石英安山岩および玄武岩の貫入を受け、一部は粘土化しているが、淡い緑色を呈する角礫凝灰岩が主体をなしている。また、一部で硬質頁岩および形質頁岩を挟在している。

硬質頁岩 (Ym: 四ツ沢層)

本岩は前記の緑色凝灰岩を包み込むように分布しており、指交状態を示している。天間ダム付近および清水目川上流に分布している本岩は黒色および灰白色の珪質頁岩を主体とし、これに暗灰色～暗褐色の硬質頁岩が挟在する。層理は明瞭で板状～縞状層理を示している。坪川以南の倉岡川、作田川および和田川の各河川の流域に分布している本岩は、全体的に暗交色～暗褐色の硬質頁岩が主体をなし、これに黒色、灰白色の珪質頁岩がしばしば挟在され、さらに中～酸性の細粒凝灰岩および角礫凝灰岩の薄層もみられる。成層良好であり、細角礫状に崩れる特徴がある。また、本岩は全体的に南北の走向を示し、西に傾斜する地質構造を示しているが、東側は急傾斜～逆転を示し、西側は20～30°と緩傾斜になり、北側にプランジする一つのドーム構造をなしている。

(3) 火山性堆積物

本図幅は北へ甲田火山の東麓的位置にあり、この火山の噴出物によって広くおおわれている。

本地域に分布する火山噴出物は、下位より熔結凝灰岩、軽石流凝灰岩、安山岩熔岩・火山泥岩および降下火山灰A・Bに大別される。

熔結凝灰岩 (Wt: 田代平熔結凝灰岩)

本岩は大坪川、小坪川流域および和田川上流などに分布している。

本岩は一般に暗紫灰色を呈し、堅硬な岩相を示す石英安山岩質の凝灰岩である。岩質的にはほぼ均一であるが、その熔結度が場所により異なり、甚だ硬質（強熔結）と軟質（弱熔結）な部分がある。重鉱物組成は $Mg > Hy > Au$ の順に多く、Hoはごく少量が含まれていない。本岩が分布している河谷は急崖をなし、尾根部は比較的平坦であることが特徴である。

本岩は従来野左掛層と呼ばれていたものであるが、現在は広域に分布することから田

代平熔結凝灰岩と呼称されている。

軽石流堆積物 (Pf)

本地域の軽石流堆積物は中川他(1986)によって4層準に区分されているが、本図幅における本堆積物の分布は局所的であるため、各軽石流堆積物の位置づけや分布を明確にできなかったため、一括して取り扱うことにした。

本堆積物は乙供付近の赤川河岸、向中野付近の中野川、七戸町付近の七戸川、東北牧場付近の川去川および大沢田付近の砂土路川河岸など分布している。

本堆積物は灰白色～灰色を呈する無層理塊状の軽石質凝灰岩で、所どころで天然木炭が含まれているのがみられる。露頭で観察される本堆積物の厚さは4～5m程度である。なお、七戸扇状地内における本堆積物は、かなり砂質となり、軽石礫も丸みを帯びており、二次的堆積物とみなされるものが分布しており、これらは七戸扇状地堆積物の一部と考えられる。

安山岩熔岩・火山ど泥流 (Mf)

本図幅の西南部に八幡岳(1,022m)および山ノ神(744.8m)などの山岳があり、これらは北八甲田火山の外輪山と考えられている。主として安山岩の熔岩よりなるが、その周辺部には安山岩の岩塊を多量に含む火山泥流が分布している。

安山岩熔岩は斑状構造を呈し、斑晶鉱物としては斜長石よりなり、石基は短冊斜長石と単斜輝石およびガラスからなり、填間組織を示すことがあり、複輝石安山岩が主体となっている。

火山灰A (A)

本地域の丘陵および台地にはローム質火山灰が比較的厚く分布している。これらの火山灰は天狗岱火山灰、高館火山灰および八戸火山灰とに区分されていて、それぞれの段丘面の構成層となっている。

本図幅の北東部および東南端部には、いわゆる天狗岱段丘・七百段丘が形成されており、そこには、前記の3層の火山灰が堆積している。千曳付近では⑤に示したように厚さ7mにおよぶ火山灰層が観察され、最上部に1m前後の厚さを持つ八戸火山灰(下部は白色軽石)がみられ、その下位に3m前後の高館火山灰(赤褐色～黄褐色)粘土質、重鉱物はシソ輝石、普通輝石、磁鉄鉱よりなり、シソ輝石は普通輝石よりもやや多い)、その下位が天狗岱火山灰(暗赤褐色、締った粘土質、3～4層の粘土化した白色浮石層

を挟む、重鉱物は一般に角閃石に富むのが特徴となつてなつている。)となつている。

火山灰B (B)

本図幅の東部中央部には、いわゆる高館段丘(標高20m~60m)が発達しており、この段丘は主として高館火山灰と八戸火山灰とによって構成されている。基盤の凹凸により層厚が異なるが、2m~4mの厚さで分布している。

(4) 火成岩類

本図幅に分布する火成岩は流紋岩、石英安山岩、安山岩、玄武岩および閃緑岩などである。

流紋岩 (Ry)

本岩は本図幅の北西部の清水目川上流高森山から隣接する野辺地町の烏帽子岳に至る一帯およびおよび作田川流域に分布している。本岩は新鮮な部分は淡青色を呈するが、一般には灰褐色~灰白色で塊状緻密であるが、一部では破碎質となり見掛け上凝灰角礫岩様となる。全体的に変質が著しく初生鉱物や組織などは不明瞭であるが、しばしば柱状節理を示している。本岩は四ツ沢の緑色凝灰岩と共存していることから四ツ沢層中の熔岩とみなされている。

石英安山岩 (Da)

本岩は本図幅の西北端の戸ノ瀬川、心棒沢から隣接する平内町へと広く分布するものと、小坪川流域、作田川上流域などに分布するものがある。前者は四ツ沢層中の熔岩として、後者は四ツ沢層および和田川層中の貫入岩と考えられている。本岩は一般に帯緑灰色班状の角閃石石英安山岩で、角閃石は緑泥石となつている。変質鉱物としては珪化作用の石英が多く、さらに鉱化変質による黄鉄鉱や絹雲などが認められる。作田川上流の大作山付近の本岩は大粒の石英が多量に含まれる粗しょうなものである。

安山岩 (An)

本岩は本図幅の西部山地の各所にみられ、いずれも和田川層の安山岩碎屑岩と共存している。北部の清水目川および坪川流域に分布する本岩は和田川層の火山碎屑岩中の熔岩および貫入岩として発達し、暗黒色班状の普通輝石紫蘇輝石安山岩で塊間状組織を示すものである。坪川以南の本岩は殆んど大部分が和田川層中の貫入岩として発達し、岩質は前記のものと同様で硬質堅硬なものである。本岩は粗屑材として採石されている所もある。

玄武岩 (Ba)

本岩は倉岡川および作田川の流域にまたがる南北に長い帯状の分布を示すもので、四ツ沢層中の熔岩と考えられている。熔岩は暗緑灰暗緑灰色～黒色を呈し無層理かつ破碎質で、一部凝灰岩的なところもあり、一般的に軟質である。なお、作田川右岸に小規模な玄武岩の貫入岩体が発達しており、柱状節理のよく発達した硬質堅硬な玄武岩となっており、現在も採石が行われている。

閃緑岩 (Di)

本岩は本図幅の西北端に広く分布する石英安山岩体の中に島状をなして産出する。一般的に岩相の変化が著しく、中心部では完晶質など粒状構造を示すが、周辺部では班状となり石英安山岩との区別が困難である。一般に珪化作用、黄鉄鉱の鉱染を受けている。本岩は四ツ沢層を貫いており、四ツ沢層堆積後の石英安山岩の火成活動によって供給されたものと思われる。

表層地質分類と開発及び保全との関係

(1) 風化殻

本図幅に分布している岩石は西部山岳地域東部丘陵台地地域および中央扇状地台地とに大別できる。

西部山岳地域には一部に新期火山噴出物（田代平熔結凝灰岩）におおわれているが、その大部分は新第三系中新統の岩石によって構成されている。全体的に比較的硬質な岩石であるが岩種構成が多様であるため不安定な状態を示している。清水目川流域の和田川層の安山岩質碎屑岩は風化殻が厚く、さらに流紋岩や石英安山岩の一部にも深層風化部がみられる。中央部～南部に分布している和田川層および四ツ沢層の泥岩・頁岩は風化はあまり進んでいないが、層理や割れ目の発達が著しい崩れ易い状態となっている。また、四ツ沢層の緑色凝灰岩も殆んど大部分が黄鉄鉱の鉱染を受けており、一部では粘土化しているところもあるなど不安定な状態となっている。

東部丘陵・台地の表層はローム質火山灰におおわれている。火山灰は粘土化が進んでいるが特に悪地形を示すところは見受けられない。しかし、各所に土取場があり、急崖を残しているところが多く、今後の崩壊や土砂流出に対する保安全管理が必要と思われる。

中央扇状地における各河川の河崖は比較的比高もあり、構成物も未固結であることか

ら不安定な状態にあるが、小規模な河崖の崩壊は一部に見られるほかは比較的安定した状態にある。しかし、宅地や畑・水田などの造成には十分注意が必要である。

(2) 鉱床

本図幅中には現在稼行されている鉱山はないが、過去には清水目鉱山および底田鉱山などで鉱山活動が行なわれた。

清水目鉱山は清水目川上流の北股沢および心棒沢にあり、黄銅鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱、四面銅鉱などを採掘した。北股沢1坑では幅15cm程度の鉱脈が数条発達しており、Ag59g/t、銅1.94%、Zn4.47%となっている。本鉱脈は四ツ沢層中に胚胎しているものである。

底田鉱山は山砂鉄鉱床としては比較的大規模なもので、昭和40年頃まで採掘が行われた。いくつかの鉱床があるが、底田鉱床は延長1,900m、厚さ600mの範囲に13枚の鉱層が狭められ、最大の鉱層は5～10mとなっている。採掘は東北砂鉄鋼業(株)天間林鉱業所で、砂鉄層は清水目川層および市、渡層に胚胎しているものである。

(3) 採石

本図幅の中で現在採石が行われているのは七戸貨物(株)と石田産業(株)との2ヶ所のみである。

七戸貨物は天間林村志茂木原の大坪川と小坪川との合流点付近にあり、昭和39年から操業が行われている。日産900 m^3 (1,200 m^3 /日可能)、推定埋蔵量は300,000 m^3 で和田川層に属する安山岩熔岩を採石している。比重2.63、吸水率3.01%、すりへり減量17.1%と良質なものである。

石田産業は七戸町左組の作田川上流右岸にあり、昭和41年から操業が行われている。日産400 m^3 で四ツ沢に属する安山岩質玄武岩の岩脈である。現在露天掘はかなり深いところで行われている。比重2.60、吸水率5.66%、すりへり減量15.5%と良質なものである。

(4) 温泉

本図幅中には天然の温泉源はないが、昭和44年上北町で深度約 700mのボーリングによって45° C前後の温泉が自噴したのを契機に付近一帯に数多くの温泉が誕生した。本図幅中には現在14の温泉源泉があり、これらの位置を地質図に、一覧表を付表に示してある。

これらの源泉は、いずれも 700m以上のボーリングによって開発されたもので、温泉包蔵帯は市、渡層、和田川層となっている。地下、増温率は5° C前後で、ほとんど大部分が単純泉である。公衆浴場や福祉センターなどに利用されている。

付表 温泉源一覧表

源泉名	所在地	深度 (m)	湧出量 (ℓ/min)	気温 (°C)	その他
東北町森林組合	東北町柳沢59	890	485	53.9	単純泉
“ 福祉センター	“ 北膳前32-1	735	157	46.0	“
“ “	“ “	688	248	44.2	“
東北町温泉	“ 膳前45-13	705	804	45.5	“
沢田濃	“ 乙供字上笹橋	700	72	42.0	食塩泉, 自噴
長崎温泉	“ 外蝦沢	675	469	45.0	単純泉
小松誠一	“ 内蝦沢向	715	432	44.5	“
天目林村	天間林村天間館	966	1,054	43.9	“
七戸温泉	七戸町	1,000	432	43.8	“
七戸町老人福祉センター	“ 立野頭	1,003	543	47.7	“
七戸桂温泉	“ 荒田川久保	800	432	46.0	“
俵坂田組	“ 東川原	1,000	543	48.3	“
新原康正	上北町大浦山	900	345	40.8	単純泉, 自噴
池の端温泉	“ 大浦字境の沢	734	1,728	52.0	“ “

(5) 地下水

本図幅中にある町村の上水道水源は大部分が地下水を利用している。野辺地町の清水目付近は青森県で最も地下水が豊富な地域で、深度 100m 前後の井戸から 2,000 m^3 ～4,000 m^3 /日の自噴量が得られている。東北町でも乙供付近に数本の水深井を設けて利用している。深度は 150m～300m で 1 井から 1,000 m^3 /日程度の揚水が行われている。天間樹林では一部小坪川の伏流水を利用しているが、他は深井戸によって水道水を得ている。簡易水道的な規模で 100m～150m 井から 300～500 m^3 /日の揚水が行われている。七戸町も数本の上水道水源井によって水道水をまかなっており、深度 200m 前後の井戸から 500 m^3 ～800 m^3 /日の揚水を行っている。

参考文献

- 岩井淳一 (1969) : 青森県東部の更新統, 東北大学地質学古生物学教室報文報告, No. 40。
- 岩井武彦 (1975) : 小川原湖畔地域における温泉群の研究, 青森県環境保健部。
(1981) : 青森県地域別地下水概況, 青森県企画部。
- 北村信, 岩井武彦, 多田元彦 (1972) : 青森県の地質, 青森県商工部。
- 金属鉱業事業団 (1976) : 広域調査報告書「八甲田地域」, 通産省・資源エネルギー庁。
- 宮内崇裕 (1985) : 上北平野の段丘と第四紀地殻変動, 地理学評論, 58-8。
- 斉藤洋彦 (1965) : 青森県七戸地方の山砂鉄鉱床, 岩鉱, 53-5。

III 土 壤 図

1. 土壤分類の細説

(1) 山地および丘陵地の土壤

本図幅の中央を南北に縦走する「国道4号線」の東側の丘陵台地と西側の八幡学（1,022m）を最高地とする山岳地帯から東に展開し、丘陵地を経て国道4号線に至る両域で出現分布している土壤の特徴に顕著な差がみられる。

東側地域の丘陵及び台地には黒ボク土壤の出現が主となっており、ここではローム質母材の上に生成発達した黒ボク土壤から黒色土層が剝離流亡して赤褐色のB層が表面近くから見られる赤褐色系褐色森林土をはじめ沢沿いの湿地にみられる黒泥土など、黒ボク土壤が微細な地形の変化に対応して出現する様子を観察出来る。

一方、西側の山岳地帯には寒冷多湿な気候下のブナ帯上部に出現する湿性ポドゾル、ヒバ林下の乾性ポドゾル及び一般の褐色森林土が広く出現分布し、丘陵地の赤褐色系褐色森林土の分布域の下部には、黒ボク土が出現分布する丘陵地及び台地へと続いている。これら台地に接続する丘陵地の黒ボク土についての解説は台地および低地の土壤の項に記載するので省略する。

1) 乾性褐色森林土壤

① 高地山統 (Tkt)

山地帯の尾根筋に一般的に見られる土壤で、乾燥しており表層近くは粒状を主体にした構造が発達しているものが多い。このタイプには適潤性褐色森林土の偏乾性型から乾性褐色森林土までを一括して図示した。

2) 褐色森林土壤

② 西ノ沢統 (Ns)

普遍的にみられる適潤性の褐色森林土で山地帯の沢頭や斜面中腹及び広がりのある平坦面等に広く分布する。

3) 褐色森林土壌（赤褐色系）

③ 横沢・I統 (Yoj-I)

丘陵地や台地に普遍的に出現する黒ボク土壌等の分布域への推移地帯に一部見られ、下層（B層）は赤褐色を呈しているのが特徴的である。

4) 褐色森林土壌（暗色系）

④ 火箱沢統 (Hbk)

このタイプは湿性ポドゾルとの推移地域に小面積みられ、ポドゾル化の傾向をうかがうことの出来る土壌である。

5) 湿性褐色森林土壌

⑤ 西股沢統 (Nmz)

山地帯の沢沿いや沢頭等に出現する土壌で腐植の侵入が深く理化学的良好なものが多い。

6) 乾性ポドゾル化土壌

⑥ 高森山統 (Tkm)

山地帯のヒバ林下及びヒバ林の伐採跡地等に出現している土壌で、局所には灰白色の溶脱部が層状を呈しているものも見られる。

7) 湿性ポドゾル化土壌

⑦ 折紙山統 (Oky)

図幅西南の八幡岳一帯をはじめブナ帯上部に広く出現する土壌で暗（錆）色の集積部が特徴的である。また、B層には浮石質の火山灰層の介在が認められた。

(2) 台地および低地の土壌

本図幅東側の山地および丘陵地に続いて、北部、中央、南部とも広大な台地が続き、次第に標高を低めながら東部へと続いている。

それら台地のうち、北部は比較的標高は高く、表層は黒ボクに覆われ、下層に粘性の

やや強い褐色土壌が多い。また中央から南部にかけての台地上も、表層が黒ボクに覆われているが、下層は十和田火山浮石砂（栗砂）の影響がみられ、図幅東南端には十和田火山浮石（ゴロタ）の影響もみられる。また図幅北東部も表層が黒ボクで覆われているが、下層には栗砂の影響は少ない。これら台地上は林地か農地として利用されているが、農地としては牧野を含めて、かつては畑地として利用されていた。しかし昭和40年頃の開田ブームにより、水利が得られた台地上はほとんど開田され、土層は攪乱され、一定の層序がみられないので、これらを一括して一統とした。

またこれら台地は西から東に向かって大小多数の河川によって解析され、それらは合流してすべて小川原湖に注ぐ。上流の谷底平野は粗粒灰色低地土（礫層）が多く、中流になるにつれて灰色低地土からグライ土、黒泥土、低位泥炭土へと移行し、下流では泥炭土から粗粒グライ土へと移行して行く。また台地間の小谷底には多湿黒ボク土、黒ボクグライ土、泥炭土などが分布する。何れにしても本図幅の表土は全て黒ボクの影響を強く受けている。なお丘陵地裾部の黒ボク土の解説は本項で解説する。

1) 厚層黒ボク土壌

⑧ 西野統 (Se)

表層は黒ボクに厚く覆われ、下層に栗砂の影響がみられる。生産力は高く、主として草地、畑地として利用されている。

⑨ 菩提寺統 (Bdi)

表層は黒ボクに厚く覆われているが、下層に栗砂の影響が少ないので西野統と区分しか。西野統と同様生産力は高く、主として畑地として利用されている。

2) 黒ボク土壌

⑩ 有戸川統-a (Arg-a)

丘陵及び台地の尾根筋や台地縁辺部に出現している黒ボク土壌で黒色土層はやや厚いが、粒状又は塊状の構造をもったものが多い。

乾性の黒ボク土壌で、主として林地として利用されている。

⑪ 有戸川統-b (Arg-b)

主として、図幅西側の山麓に出現している土壌で、緩斜面や台地及び斜面中～下部に

みられ黒色土層がやや厚く適潤性である。主として林地として利用されている。

⑫ 有戸川統-C (Arg-c)

東側の凹地や沢沿及び斜面下部に出現する湿性の黒ボク土壌で、下層にはグライ層を伴うものをあり理化学性がやや不良なものが多い。主として林地として利用されている。

⑬ 相坂-I統-a (O-I統-a)

丘陵末端及び台地の尾根筋や台地縁辺部に出現している乾性の黒ボク土壌で、下層が栗砂の影響を受けている。主として林地、畑地として利用されている。

⑭ 相坂・I統-b (O-I-b)

丘陵地末端及び図幅南部の台地上に広く分布する適潤性黒ボク土壌で、黒ボク土がやや厚く、下層が栗砂の影響を受けている。主として林地、畑地として利用されており、生産力も高い。

⑮ 相坂I統-C (O-I-C)

図幅西側の沢沼や凹地に見られる湿性の黒ボク土壌で、腐植の侵入が深く、A層上部には団粒状構造が見られ、理化学性に比較的富んだ生産力の高い土壌である。

⑯ 三沢統-a (M-a)

図幅北東部の台地の尾根筋や台地縁辺部に出現する乾性の黒ボク土壌で、黒色土層はやや薄く、生産力も低い。主として林地として利用されているが、本図幅では極めて小面積である。

⑰ 三沢統-b (M-b)

図幅北東部の台地上に広く分布する適潤性の黒ボク土壌である。主として林地、畑地として利用されている。表層の黒ボク土壌は本来厚いが、開畑などではやや薄い場合もある。下層に栗砂の影響は少なく、生産力は比較的高い。

⑱ 三沢統-C (M-c)

図幅北東部の凹地や沢沿及び斜面下部に分布する湿性の黒ボク土壌である。表層の黒ボク土壌はやや厚く、栗砂の影響は少ない。主として林地として利用されているが、面積的には極めて狭小である。

⑲ 三本木統 (Sab)

図幅東南部の黒ボクの台地上に分布する。かつて畑作地帯であったところが開田され、水田化した土壌を本統とした。本質的には相坂統、相坂I統、相坂II統、相坂III統と同

じく、表層黒ボク土壌、下層栗砂の介在する土壌である。開田の際、土層は攪乱されている場合が多いので、地形と土層層序との関係は把握しにくい。主として水田に利用されているが、最近畑地に還元されているところも少なくない。生産力は比較的高い。

㊸ 牛鍵統 (Usk)

黒ボク台地上の、かつて畑作地帯であったところが開田された土壌を本統とした。三本木統と同様、開田のため土層層序が攪乱されているのは同様であるが、下層に栗砂の影響はみられるものの、層としては認められないので三本木統と区分した。植生その他は三本木統と同様である。

3) 粗粒黒ボク土壌

㊹ 相坂統 (O)

三本木統と同様、かつて畑作地帯の開田土壌を主として本統とした。三本木統と異なる点は栗砂など火山砂礫の出現位置が50cm以内より出現し、保水性などの物理性が劣る土壌を本統とした。生産力は高くない。本図幅では東南端に極めて小面積で存在する。

㊺ 相坂・Ⅲ統 (O-Ⅲ)

本質的には相坂統と同様であり、本土壌統が開田されると相坂統となる。50cm以内より栗砂層が出現するが、土層層序は攪乱されていない。主として畑地として利用されている。

4) 多湿黒ボク土壌

㊻ 二又統 (Ftm)

黒ボク土壌の古田であるが、次の相坂・Ⅱ統とは異なり、黒ボク台地間の沢筋の狭小な水田に分布する。

㊼ 下板橋統 (Shi)

黒ボク台地上に分布する黒ボク土壌であるが、地形的関係などから酸化鉄の斑紋を形成しているがグライ化までには、いたっていない。畑地として利用されているが、面積的には狭小である。

㊽ 相坂Ⅱ統 (O-Ⅱ)

本質的には相坂Ⅰ統などと同様であるが、黒ボク台地上の古田および比較的古い開田

のところを本統とした。表層は黒ボク土壌で、栗砂などの火山砂礫を介在する。水田としての年数が古いため、斑鉄などの酸化沈積物が発達し、生産力は最も高い土壌である。

5) 黒ボクグライ土壌

㊸ 清水川統 (Smg)

小河川流域、台地の狭い浸食谷上に分布する。表土は腐植質の黒ボク土壌に覆われ、下層は地形により異なる。グライ斑、グライ層が出現し、斑鉄はあまり発達していない。生産力は普通で、水田として利用されている。

㊹ 一ノ渡統 (Ich)

本質的には清水川統に類似するが、グライ度が強く、下層にグライ化された礫層を有する。斑鉄は発達せず、生産力は高くない。水田として利用されている。

6) 淡色黒ボク土壌

㊺ 野辺地統 (Nhj)

図幅北部の台地上に分布する。人工的作為が大きい土壌である。黄褐色ローム質土壌の上に薄い黒ボク土壌をのせている。主として草地、畑地に利用されているが生産力はそれほど高くない。

7) 細粒灰色低地土壌

㊻ 老部川統 (Oip)

比較的大河川中流の谷底平野上に分布する。灰褐色の粘質土壌で、酸化的で斑鉄が発達し、生産力は高い。水田として利用されている。

8) 灰色低地土壌

㊼ 田子統 (Tako)

老部川統よりやや上流に分布し、灰褐色の中粒質土壌で、酸化的で斑鉄も発達し、生産力は高い。水田として利用されている。

9) 粗粒灰色低地土壤

㊸ 脇野沢統 (Ws)

河川上流の谷底平野上に分布する。砂礫層の上に薄い灰褐色の中粒質土壤をのせ、斑鉄に富み、盤層を作る場合も多い。有効土層薄く生産力は高くない。水田として利用されている。

10) 細粒グライ土壤

㊹ 細津統 (Hst)

狭小な浸食谷から河川中流の谷底平野にかけて分布する。粘質～強粘質の強グライ土壤である。表土は黒ボクの影響を受けており、排水不良の土壤で斑鉄は余り発達していない。水田として利用されている。生産力は普通である。

11) グライ土壤

㊺ 小坪川統 (Ktg)

洪涵地内の排水不良な個所にみられるもので、下層のグライ斑が特徴的である。

12) 粗粒グライ土壤

㊻ 鶴ヶ崎統 (Trg)

主として河川中流の谷底平野に分布する。粗粒質のグライ化土壤の上にやや薄い黒ボク土壤をのせている。強グライ土壤で、斑鉄は余り発達せず、排水不良で生産力は高くない。水田として利用されている。

13) 低位泥炭土壤

㊼ 戸鎖統 (Tks)

河川上流の狭小な谷底平野から中流のそれにかけて分布する。泥炭の厚さ50cm以上で、めの上に黒ボク土壤をのせている。作土直下よりグライ層で斑鉄は発達しない。水田として利用されている。生産力は低い。

㊽ 保戸沢統 (Hoz)

狭小な谷底平野に分布する。土壤は戸鎖統に類似するが、泥炭層の厚さがやや薄く、

戸鎖統より酸化的である。水田として利用されている。生産力は低い。

14) 黒泥土壌

㊸ 立崎統 (Tat)

河川中流の谷底平野上に分布する。表層は黒ボク土壌に覆われ、下層の泥炭層の上に黒泥層をのせている場合が多い。泥炭土壌よりは酸化的で比較的生産力も高い。水田として利用されている。

15) 洪涵土

㊹ 洪涵土

河床の勾配がゆるやかな個所に泥や砂永堆積して出来た洪涵地にみられるもので、理化学性は極めて良好で、杉の育成には好適である。

松 尾 弘 (青森営林局盛岡営林署)

岩 村 良 男 (青森県林業試験場)

相 馬 駿 春 (青森県農業試験場)

鎌 田 健 造 (青森県農業試験場)

土壤統対比一覧表

図幅名 土壤統群名	七戸	青森東部	三沢	十和田	野辺地
厚層黒ボク土壤	西野統		西野統		
	菩提寺統				菩提寺統
黒ボク土壤	有戸川統-a				有戸川統-a
	有戸川統-b	田茂木統			有戸川統-b
	有戸川統-c				有戸川統-c
	相坂Ⅰ統-a			相坂Ⅰ統-a	
	相坂Ⅰ統-b			相坂Ⅰ統-b	
	相坂Ⅰ統-c			相坂Ⅰ統-c	
	三沢統-a		三沢統-a		三沢統
	三沢統-b		三沢統-b		三沢統
	三沢統-c		三沢統-c		三沢統
	三本木統			三本木統	
	牛鍵統		三沢統-b		
粗粒黒ボク土壤	相坂統		相坂統-a 相坂統-b 相坂統-c	相坂統	
	相坂Ⅲ統		相坂統-a 相坂統-b 相坂統-c	(相坂Ⅰ統-b)	
多湿黒ボク土壤	二又統	久吉統		二又統	二又統
	下板橋統		下板橋統		
	相坂Ⅱ統			相坂Ⅱ統	
ボクグライ土壤	清水川統	中野統	(深谷統)	(深谷統)	清水川統
	一ノ瀬統				一ノ瀬統

図幅名 土壤統群名	七戸	青森東部	三沢	十和田	野辺地
淡色黒ボク土壌	野辺地統	菅野統			野辺地統
乾性褐色森林土壌	高地山統	雲谷峠統		惣部統 - a	高地山統
褐色森林土壌	西ノ沢統	鳴沢統		惣部統 - b	西ノ沢統
褐色森林土壌(赤褐色)	横沢Ⅰ統				
褐色森林土壌(暗色系)	火箱沢統	火箱沢統			
湿性褐色森林土壌	西股沢統	西股沢統		惣部統 - c	西股沢統
乾性ポドゾル化土壌	高森山統	高森山統		子増沢統	貴船川統
湿性ポドゾル化土壌	折紙山統	折紙山統			鳥帽子岳統
細粒灰色低地土壌	老部川統				老辺川統
灰色低地土壌	田子統	高根統	田子統	田子統	
細粒灰色低地土壌	脇野沢統	大鱈統 川原統		脇野沢統 杉沢統	脇野沢統
細粒グライ土壌	細津統		細津統		細津統
グライ土壌	小坪川統				
粗粒グライ土壌	鶴ヶ崎統	大川平統	鶴ヶ崎統		鶴ヶ崎統
低位泥炭土壌	戸鎖統 保戸沢統	長富統 長富統	長富統 長富統		戸鎖統 保戸沢統
黒泥土壌	立崎統	夕日ヶ丘統		立崎統	

IV 土地利用現況図

1. 農用地

本図幅に関係する7市町村の土地利用をみると耕地面積が28,730haと総面積の22.4%を占め、うち地目別割合は水田が59.8%と、もっとも高く、次いで普通畑23.6%、牧草地16.0%、樹園地0.6%の順となっている。

1) 水田

7市町村の総水田面積は、17,168haとなっているが、本図幅分に係る水田は、プランメーター計測によると33.8%に当たる5,810haとなっている。

これらの水源は、図幅内西側にみられる八甲田山系を流域に、坪川、中野川、七戸川の主要3河川によってかんがいされている。

特に坪川、中野川の上流部に広がる1,120haの水田は、戦時中は、軍馬育成に利活用され、戦後は開拓地として入植者を受け入れて来たが、昭和43年の天間ダムの完成とともに開田された地域である。

2) 普通畑

7市町村の総畑面積は、6,771haとなっているが、本図幅では、中央部から東部に中小の団地で点在し、計測によると2,770haで、総畑面積の40.9%を占めている。

主な作物としては、ながいもを筆頭に、にんにく、ニンジンと根菜類が殆どを占めるなど、水稲と畑作の複合経営の定着化がみられる。

特に、東北町にあっては、ながいもの出荷量は全国のシェアの30%を占めている。

3) 果樹園

果樹の作付については、厳しい気象条件の制約等他地域と比較して、極端に少なく図幅には、僅かに七戸町の39haが小規模に分散されてみられる。

4) 草地（人工牧草地）

県全体の人工牧草地に占める図幅中の割合は、24.7%と高く、面積も45.9km²となっている。

特に図幅内中央の七戸町には、明治29年に開設された農村水産省奥羽種畜牧場が广大

な面積を有し、地域の畜産業に貢献しているほか、図幅内右上方の東北町には、民営牧場が拓かれ、肉用牛、乳牛が放牧され、加えて競争馬の育成に小規模な人工草地在民営で運営されているなど、比較的平坦地を利用した人工牧草地の形成が図られている。

2. 林地

林地は、本図幅内の66.7%に当たる 260km²であり、その内訳は国有林35.4%、民有林31.3%とほぼ同面積となっている。

植生状況は、図幅西側の八幡岳（1,022m）から北方、図幅中央部の大坪川近くまで、チシマザサ-ブナ群団が広がり、烏帽子岳（720m）から東方高森山（309m）にかけて、チシマザサ-ブナ群団及びヒノキアスナロ群落を覆い、その周辺にブナ-ミズナラ群落が又、図幅中央下方の門根沢（272m）一帯には、主にカスミザクラ-コナラ群落がみられ、本図幅西部側には、天然広葉樹林が多く植生している。

人工針葉樹林については、スギが主体となって図幅中央より西部側を中心に全域にみられ、又アカマツも右上方に一部見られる。

3. 市街地村落

本図幅内、七戸町は、かつて七戸南部藩の城下町として栄え、明治35年9月1日、町制を施行し、永年上十三地方の教育、文化、経済の中心地として発展した。

本図幅内集落の形成は主に図幅内を南北に縦断している国道4号線沿いと国道4号より北西に走る、七戸上北町（停）線、七戸榎林平沼線及び乙供（停）中野線沿いの集落のほか図幅内ほぼ中央より東側の平坦部に多くの集落が散在している。

4. その他

7市町村の土地利用の形態別面積と土地利用の規制区域指定面積は、第IV-1表および第IV-2表のとおりである。

佐藤春夫（青森県農林部土地改良第一課）

第IV-1表 土地利用の概要

(単位: ha)

区分 市町村	総面積	耕地計	耕地内訳				宅地	山林		その他
			田	畑	牧草地	樹園地		国有林	民有林	
十和田市	318.39	9,973	7,460	1,500	902	111	1,242	3,697	13,938	2,989
野辺地町	82.66	1,037	426	307	303	1	259	2,032	4,339	599
七戸町	136.08	3,250	1,180	686	1,340	44	250	3,924	5,084	1,100
上北町	119.25	2,798	2,070	644	83	1	229	14	1,546	7,338
東北町	209.72	5,731	1,590	2,560	1,570	11	263	6,199	7,618	1,161
平内町	215.98	1,930	1,500	305	115	10	221	4,490	12,581	2,376
天間林村	199.92	4,011	2,960	769	274	8	204	10,920	3,147	1,710
計	1,282.00	28,730	17,186	6,771	4,587	186	2,668	31,276	48,253	17,273

資料: 耕地及び山林について、第36次青森農林水産統計年報より
宅地については、固定資産価格概要調書(平成元年度)より。

第IV-2表 土地利用の規制区域指定

(単位: ha)

区分 市町村	面積 k ²	都市計 画区域	市街化 区域	市街化 調整区域	農業振 興区域	農用地 区域	保安林 面積	自然公 園面積
十和田市	318.39	17,344	—	—	25,948	13,472	2,163	—
野辺地町	82.66	1,570	—	—	4,950	843	867	—
七戸町	136.08	7,545	—	—	7,566	3,684	4,238	—
上北町	119.25	—	—	—	5,526	2,625	13	—
東北町	209.72	7,216	—	—	14,620	4,632	1,283	—
平内町	215.98	4,540	—	—	10,598	2,245	2,735	3,906
天間林村	199.92	—	—	—	8,830	3,158	11,070	—
計	1282.00	38,215	—	—	78,038	30,659	22,369	3,906

資料: 都市計画区域は、青森県の土地利用平成2年3月
農業振興区域は、農業振興地域整備計画総覧平成元年3月
保安林は県治山課資料による(平成2年3月)
自然公園は県自然保護課資料による(平成2年3月)

1991年3月 印刷発行

土地分類基本調査

七 戸

編集発行 青森県農林部土地改良第一課
青森市長島1丁目1番1号

印刷 (地図・説明書)

昇寿チャート株式会社
東京都台東区台東2丁目27番9号